

令和6（2024）年度

「運営に関する計画」
最終評価



大阪市立瓜破小学校

令和7（2025）年3月

大阪市立瓜破小学校 令和 6 (2 0 2 4) 年度 運営に関する計画・自己評価 (総括シート)

1 学校運営の中期目標

現状と課題

学力については全国学力・学習状況調査、大阪市経年調査において、学力に課題の見られる児童の割合が高い。基礎・基本の問題の正答率にも課題があり、特に算数科においてその傾向は強い。また授業中に理解していても、時間がたつと忘れてしまいテストの正答率が低くなり定着が難しい児童が少なからずいる。放課後学習などを充実させているが、毎日実施できるわけではなく、そういった児童へのフォローアップ体制を確立することが課題といえる。

さまざまな理由から生活リズムや学習習慣が確立されていないことで、登校を渋るなど不安を抱えながら登校してくる児童のケアが必要である。安心して学校生活を送れるように自己肯定感を高める必要がある。

中期目標

【最重要目標 1 安全・安心な教育の推進】

- 全国学力・学習状況調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を 80%以上にする。(令和 3 年度 72.6%, 令和 4 年度 78.3%, 令和 5 年度 81.0%)
- 年度末の校内調査において、不登校児童の在籍比率を前年度より減少させる。(令和 3 年度 1.8%, 令和 4 年度 2.45% 令和 5 年度 2.77%)
- 年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を増加させる。(令和 5 年度は 9 人中 3 人の 33.3%改善傾向)

【最重要目標 2 未来を切り拓く学力・体力の向上】

- 小学校学力経年調査における「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を 40%以上にする。(令和 4 年度 34.5% 令和 5 年度 33.2%)
- 小学校学力経年調査における国語および算数の平均正答率の対全国比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より 1 ポイント向上させる。
- 小学校学力経年調査における「理科の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を 80%以上にする。(令和 4 年度 85%令和 5 年 74%)
- 小学校学力経年調査における「外国語(英語)の勉強は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を 75%以上にする。(令和 4 年度 74%令和 5 年度 71.9%)
- 小学校学力経年調査における「運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」と回答する児童の割合を 73%以上にする。(令和 4 年度 72.2%令和 5 年度 70.0%)

【最重要目標 3 学びを支える教育環境の充実】

- 学習者用端末を活用した家庭学習を週 1 回実施する。
- ゆとりの日(18 時セット)を週に 1 回設定・実施し、「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準 2 (年間 7 2 0 時間を超えない、1 か月 4 5 時間を超える月を 6 か月まで、1 か月 1 0 0 時間を超えない、連続する複数月の 1 か月平均 8 0 時間を超えない)を満たす教員の割合を 8 0 %以上にする。(令和 4 年度 88% 令和 5 年度 96%)

2 中期目標の達成に向けた年度目標

【安全・安心な教育の推進】

○小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を 80%以上にする。(令和 4 年度 78.3% 令和 5 年度 74.1%)

○年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を増加させる。(令和 5 年度は 10 人中 3 人の 30%が改善)

○年度末の児童アンケートにおける「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、肯定的な回答をする児童の割合を 100%にする。

(令和 5 年度 97.3%)

【未来を切り拓く学力・体力の向上】

○小学校学力経年調査における算数の平均正答率の対全国比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より 0.5 ポイント向上させる。

(令和 5 年度 4 年±0、5 年-2.4、6 年+0.7)

○小学校学力経年調査における「運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」と回答する児童の割合を 73%以上にする。(令和 4 年度 72.2% 令和 5 年度 70.0%)

○大阪市経年調査における算数科の学力に課題の見られる児童の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より 0.5 ポイント減少させる。(令和 5 年度 達成学年 2/3 4 年±0、5 年-2.4、6 年+0.7)

【学びを支える教育環境の充実】

○授業日において、児童の 8 割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の 50%以上にする。

○ゆとりの日(18 時セット)を週に 1 回設定・実施し、「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準 2 (年間 720 時間を超えない、1 か月 45 時間を超える月を 6 か月まで、1 か月 100 時間を超えない、連続する複数月の 1 か月平均 80 時間を超えない)を満たす教員の割合を 80%以上にする。

○ゆとりの日(18 時セット)を週に 1 回設定・実施し、「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準 2 (年間 720 時間を超えない、1 か月 45 時間を超える月を 6 か月まで、1 か月 100 時間を超えない、連続する複数月の 1 か月平均 80 時間を超えない)を満たす教員の割合を 80%以上にする。(令和 4 年度 88%令和 5 年度 96%)

○小学校学力経年調査において「読書は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を 60%にする。(令和 5 年度 58.2%)

3 本年度の自己評価結果の総括

【安全・安心な教育の推進】

○小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合は 84.8 %（令和 5 年度 74.1%）

○年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合は 0%だった。しかし、学校全体では 10 人中 2 人が不登校の改善傾向がみられた。（令和 5 年度は 10 人中 3 人の 30%が改善）

○年度末の児童アンケートにおける「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、肯定的な回答をする児童の割合は 97.6%（令和 5 年度 97.3%）

（総括）

「いじめについて考える日」や道徳科での学習を通じて、児童のいじめに対する理解は進んだが、具体的に「いじめとは何か」を理解できていない児童もいるため、今後も定義を含めた指導を継続する。

不登校児童への支援として、児童に寄り添い、家庭訪問や電話での関わりを続けているが、改善傾向は見られない。引き続き、孤立しないような支援を行う。

「瓜破小学校安心ルール」を指導の基盤として使用し、教職員の間で一貫した指導ができている。しかし、ルールを理解していない児童もいるため、学年や学級の実態に応じた説明が必要である。

このように、学校は児童の安全と成長を促進するために、いじめ対策や不登校支援を行い、指導方法や内容の改善を続けている。今後も、児童一人一人に合った指導を進めていく方針を継続したい。

【未来を切り拓く学力・体力の向上】

○小学校学力経年調査における算数の平均正答率の対全国比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より 0.5 ポイント向上させるの項目で、4 年－7 5 年－6.3 6 年＋13.2 であり、達成した学年は 1/3 であった。（令和 5 年度 4 年±0、5 年-2.4、6 年+0.7）

○小学校学力経年調査における「運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」と回答する児童の割合は 52.9%（令和 4 年度 72.2% 令和 5 年度 70.0%）

○大阪市経年調査における算数科の学力に課題の見られる児童の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より 0.5 ポイント減少させるの項目で、4 年で＋12.7%、5 年で＋10.3%、6 年で－27.7%であり、0.5 ポイント減少した学年は 1/3 であった。（令和 5 年度 達成学年 2/3 4 年±0、5 年-2.4、6 年+0.7）

（総括）

計算力の向上については目標達成に至らなかった。理由として、実施した対策が十分に効果を上げていないからと考えられる。特に朝学や子どもとの日など日常的な学習活動について見直しを行う必要がある。

運動については、指標に対して目標を下回った。目標設定の基準を見直し、より児童の実態を明確に把握できるように次年度以降は改善したい。また、児童が運動する機会を確保するため、時間と場所の提供が必要だと考える。

朝食については、ほけんだよりやえいようだよりでの啓発活動は一定の成果を上げているが、市平均と比較して朝食を毎日食べている児童の割合が低い。この点についても地域や家庭の実態を踏まえた上で、さらに効果的な啓発方法や支援を検討したい。

全体的に、実態を反映させた目標設定や新しい取り組みを通じて、今後の活動にさらなる改善を加えることが重要だと考える。

【学びを支える教育環境の充実】

○授業日において、児童の 8 割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の 1.4%

○ゆとりの日（1 8 時セット）を週に 1 回設定・実施し、「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準 2（年間 7 2 0 時間を超えない、1 か月 4 5 時間を超える月を 6 か月まで、1 か月 1 0 0 時間を超えない、連続する複数月の 1 か月平均 8 0 時間を超えない）を満たす教員の割合は 100%（令和 4 年度 88%令和 5 年度 96%）

○小学校学力経年調査において「読書は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合は 62.7%（令和 5 年度 58.2%）

（総括）

学習者用端末の利用率が目標の 50%に対して 1.4%にとどまっているが、10 月～12 月の利用率は 60%

台まで上がってきており、児童が実際に端末を活用する機会が増えていることを示している。指標としての学習者用端末の利用の定義に幅を持たせ、実態に即した評価を行う必要がある。

実際には、学習者用端末を利用した授業（パワーポイントやスカイメニューを使った意見交換）は行われており、児童の肯定的な回答は 83.1%に達している。

教員の時間外勤務が昨年より減少しており、約 25 時間で校種別平均を 1 時間超えているものの、全体的には改善傾向が見られる。しかし、「勤務時間と業務量が合っていない」といった教員の実感から、さらに効率的な業務運営が必要である。定時退勤の難しさや「ゆとり」日を設けても勤務時間の改善が実感できていないという点は、業務量や時間配分の見直しが必要であることを示唆している。教員の負担軽減に向けた継続的な対策が必要である。

読書活動の指標目標 60%に対して 62.7%は若干の上回りを達成しているが、学年別に差がある。図書委員会やボランティアの読み聞かせ活動が一定の効果を挙げている。今後は、読書活動を学校全体で組織的に推進し、学年の実態に応じた内容を提供することが、さらに効果的な読書推進につながると考えられる。

大阪市立瓜破小学校 令和 6 年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準	A：目標を上回って達成した	B：目標どおりに達成した
	C：取り組んだが目標を達成できなかった	D：ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成 状況
【最重要目標 1 安全・安心な教育の推進】 ○小学校学力経年調査における「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、最も肯定的な「思う」と回答する児童の割合を 80%以上にする。（令和 4 年度 78.3% 令和 5 年度 74.1%）令和 6 年度 84.8% ○年度末の校内調査において、前年度不登校児童の改善の割合を増加させる。（令和 5 年度は 9 人中 3 人の 33%が改善）令和 6 年度 10% ○年度末の児童アンケートにおける「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、肯定的な回答をする児童の割合を 100%にする。（令和 5 年度 97.3%）令和 6 年度 97.6%	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗 状況
取組内容①【基本的な方向 1，安全・安心な教育環境の実現】 ○瓜破小学校安心ルールを指導のよりどころにして、児童が安心して学校生活を過ごすことができるように指導を重ねていく。 ○児童が困ったときに、教職員集団全員で困り感を受け止め、丁寧に指導にあたる。	B
指標 ○年度末の児童アンケートにおける「学校は安心できる場所だ」に対して、肯定的な回答をする児童の割合を 90%にする。→令和 6 年度 86.7%	
取組内容②【基本的な方向 2，豊かな心の育成】 ○多様な特性への相互理解を深め、一人ひとりの自尊感情を育てていく。 ・芸術鑑賞の実施 ・校外体験活動の実施 ・性の多様性の学習の実施	A
指標 ○年度末の児童アンケートにおける「いろいろなことを知りたい、やってみたいと思いますか」に対して、肯定的な回答をする児童の割合を 80%にする。 →令和 6 年度 87.6%	
年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析	
【最重要目標について】 いじめについては、「いじめについて考える日」での全校児童に対する指導に加え、各学年、学級において、道徳科の学習や日々の指導を積み重ねてきた。その結果、経年調査、校内調査ともに、肯定的な考えを示す児童の割合は増加した。しかし、「いじめはいけない」と頭では理解しているが具体的に「いじめというのはどんなことか」ということを理解できていない児童もいるので今後もいじめの定義も含め、指導を継続していく。 不登校児童については、児童に寄り添った指導や関係を切らない取り組み（家庭訪問や電話等での関わり）を続けている。今後も児童が孤立しないように継続的に取り組みを続けていく。	

取組内容①

瓜破小学校安心ルールを指導の拠り所として、教職員が活用することで指導に一貫性をもたせることができた。しかし、安心ルールを理解しきれていない児童もいるので、学年、学級の実態に応じてかみ砕いて説明したり、言葉を置き換えて指導したりしていくことも必要であるとする。

また、毎月、児童の様子を教職員で共有しているため、学校全体で児童を見守っていく体制が整えられていた。今後も、学校全体で児童を見守っていく体制を継続していく。

取組内容②

様々な体験活動を実施してきた結果が、児童のやってみたいといった意欲にもつながってきた。また、地元の方や地元の素材をもとにした学習を積み重ねることで、地元への愛着心も育ってきている。しかし、性の多様性の学習など特定の学年しか実施できなかった取り組みや学年の実態に合わなかった取り組みもあった。今後は、内容の見直しを行い、より児童の実態に即した学習にしていきたい。

大阪市立瓜破小学校 令和6年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準	A：目標を上回って達成した	B：目標どおりに達成した
	C：取り組んだが目標を達成できなかった	D：ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
【最重要目標2 未来を切り拓く学力・体力の向上】 ○小学校学力経年調査における算数の平均正答率の対全国比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より0.5ポイント向上させる。 （令和5年度 4年±0、5年-2.4、6年+0.7） ○小学校学力経年調査における「運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」と回答する児童の割合を71%以上にする。（令和5年度70.0%） ○大阪市経年調査における算数科の学力に課題の見られる児童の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より0.5ポイント減少させる。 （令和5年度 達成学年2/3 4年±0、5年-2.4、6年+0.7）	C

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標	進捗状況
取組内容①【基本的な方向4、誰一人取り残さない学力の向上】 ○算数科の基礎学力の定着と向上を図るために、各児童の課題を明確にし、既習学習にさかのぼって、朝学習等を活用した補充指導をおこない、計算力が向上するように取り組む。 ○「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、算数科を中心に授業改善に取り組み、教員の授業力向上を図る。	B
指標 ○算数科の授業研究・討議会を各学年で年1回以上実施する。 ○年度末の児童アンケートにおける「授業はわかりやすい」に対して、肯定的な回答をする児童の割合を年度当初より増加させる。 ○メンター部会を学期1回以上実施する。	
取組内容②【基本的な方向5、健やかな体の育成】 ○運動を楽しみながら行えるように学習活動や集会等で体を動かす機会を工夫する。	C
指標 ○小学校学力経年調査における「運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」と回答する児童の割合を71%以上にする。→令和6年度52.9%	
取組内容③【基本的な方向5、健やかな体の育成】 ○朝ごはんの大切さを指導し、学校だより、栄養だより、ほけんだよりを通して家庭にも啓発する。	B
指標 ○「けんこうチャレンジ週間」に朝ごはんの項目を加え、年3回実施する。	

年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析
【最重要項目について】 ○小学校学力経年調査における算数の平均正答率の対全国比を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より0.5ポイント向上させる。 算数 4年（-7.0）5年（-6.3）6年（+13.2） 目標を達成できていない。→ C ○小学校学力経年調査における「運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」と回答する児童の割合を71%以上にする。 全体52.9% → C

○大阪市経年調査における算数科の学力に課題の見られる児童の割合を、同一母集団において経年的に比較し、いずれの学年も前年度より 0.5 ポイント減少させる。

4 年 (+12.7%) 5 年 (+10.3%) 6 年 (-27.7%)

1 学年しか目標を達成できていない。 → C

取り組み内容①

○算数科の授業研究・討議会を各学年で年 1 回以上実施する。→ 達成

○年度末の児童アンケートにおける「授業はわかりやすい」に対して、肯定的な回答をする児童の割合を年度当初より増加させる。6 月 88% → 12 月 91% → 達成

○メンター部会を学期 1 回以上実施する。→ 達成

しかし、年度目標における計算力の向上は経年の結果だけみると達成できているとはいえない。朝学の見直しや子どもとの日など他にも対策を講じる必要があると考える。

取り組み内容②

○小学校学力経年調査における「運動(体を動かす遊びを含む)やスポーツをすることは好きですか」に対して、最も肯定的な「好き」と回答する児童の割合を 71%以上にする。

全体 52.9% → 達成できていない

なわとび週間や期間を定めて休み時間に講堂を開放してマット運動や跳び箱を行えるよう

な取り組みを行うなどの対策が必要だと考える。しかし、「最も」ではなく、肯定的な割合で考えると、どの学年も 78%以上となる。来年度は、この結果を踏まえ、『最も肯定的な「好き」と回答する児童の割合を 60%以上に』となるように設定するなど指標を実態に合わせて変える必要がある。

取り組み内容③

○「けんこうチャレンジ週間」に朝ごはんの項目を加え、年 3 回実施する。→ 達成

ほけんだよりやえいようだよりの中でおすすめの朝ごはんのメニューや朝ごはんの効果を伝えることができた。

しかし、経年調査の「朝食を毎日食べていますか」の項目に肯定的に回答する児童の割合は

市平均と比べると全学年下回っているので、朝ごはんの大切さを啓発できているかは難しいところ。地域の特色や家庭の実態もあるので、単純に市の平均と比べられるわけではないが。

3 年 (-13) 4 年 (-9.2) 5 年 (-2.4) 6 年 (-3.1)

一方で、学校アンケートでは「毎日、朝ごはんを食べていますか」という項目に肯定的に答える児童の割合は年度当初と比べると増加している。(86.4→91.4)

大阪市立瓜破小学校 令和6年度 運営に関する計画・自己評価（目標別シート）

評価基準 A：目標を上回って達成した B：目標どおりに達成した
C：取り組んだが目標を達成できなかった D：ほとんど取り組めず目標も達成できなかった

年度目標	達成状況
【最重要目標3 学びを支える教育環境の充実】 ○授業日において、児童の8割以上が学習者用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。。→（令和6年1月時点で1.4%） ○ゆとりの日（18時セット）を週に1回設定・実施し、「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準2を満たす教員の割合を80%以上にする。（令和4年度88%令和5年度96% 令和6年2月時点で100%） ○小学校学力経年調査において「読書は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を60%にする。（令和5年度58.2%）→令和6年度62.7%	B

年度目標の達成に向けた取組内容、取組の進捗状況を測る指標		進捗状況
取組内容①【基本的な方向6、教育DXの推進】 ○児童の心の変化や効果的な学習活動になるように、心理面・学習面など多面的に学習者用端末を活用する。	B	
指標 ○年度末の児童アンケートにおける「日々の学校活動の中で学習者用端末を活用している」に対して、肯定的な回答をする児童の割合を前年度より増加させる。 令和5年度末…82.0%、令和6年度末…83.1%		
取組内容②【基本的な方向7、人材の確保・育成としなやかな組織づくり】 ○教員が児童の前で健康で生き生きと働くことができ、児童一人ひとりに向き合う時間を確保するように取り組む。	B	
指標 ○ゆとりの日（18時セット）を週に1回設定・実施し、「学校園における働き方改革推進プラン」に掲げる教員の勤務時間に関する基準2を満たす教員の割合を80%以上にする。		
取組内容③【基本的な方向8、生涯学習の支援】 ○学校図書館、読み聞かせボランティア、読書ノートを活用することで児童が読書に親しむ環境の充実を図る。	B	
指標 ○小学校学力経年調査において「読書は好きですか」に対して、肯定的に回答する児童の割合を60%以上にする。→令和6年度62.7%		
年度目標の達成状況や取組の進捗状況の結果と分析		
【最重要目標について】 指標の目標50パーセントに対しては1.4パーセントと大きく下回った。しかし10月～12月では児童の利用率が65パーセント台まで上がっており、8割までもう少しのところまで来ている。令和7年度以降も運営の計画に指標として入るとすれば、この「学習者用端末の利用」の定義に幅を持たせ、実際の利用状況と評価が合うように指標の内容を検討したい。		
取組内容① 学習者用端末の利用状況は83.1%が肯定的にとらえており、昨年度を上回っている。パワーポイントを使った資料の作成や、授業者がスクイメニューを使って意見や考えの交流をスムーズに行っている。一方で、タイピングソフトや好きなキャラクターの検索など、単一的な使用が日常化し、利用頻度が増えている傾向もある。利用率を上げると同時に、より効果的な学習に役立つ方法を研修を通して身につけていきたいと考える。		

取組内容②

教員の一人当たりの平均時間外勤務（1 月度）は累計約 25 時間と校種別平均の 23 時間 57 分を約 1 時間程度上回っているが、昨年比べて 1 時間以上減っている。また、指標の目標 80 パーセントに対しては 100 パーセントの達成率であった。

しかし教員の実感としては勤務時間と業務量が合っていないというコメントが続いている。「ゆとり」の日は設けるが、5 時に退勤することが困難であるという声も少なくない。

取組内容③

指標の目標 60 パーセントに対して 62.7 パーセントとやや上回っている。学年別に見ると、3 年で 62.8 パーセント、4 年で 59.6 パーセント、5 年で 72.5 パーセント、6 年で 55.9 パーセントと差がある。

図書委員会の取り組みやボランティアの読み聞かせなど、一定の効果は得られたものの、本質的に読書好きを増やすためには成長段階に合わせた継続的な学校全体の取り組みが必要であるという意見もある。